

一仏兩祖の教えを今に伝える

令和4年3月1日発行(毎年1.3.6.9月の1日発行) 第160号

# 曹洞禅グラフィック

SOTŌZEN GRAPHICS

2022お彼岸 春号 No.160

インタビュ―  
ルポライター  
高橋繁行氏  
消えゆく「土葬」に考える、  
命のつながりと見送りの形  
〔聞き手〕柳澤円



# 仏

教の考え方の柱になっ  
ているものの一つに、  
この言葉があります。

「諸法無我」

この世のあらゆるものは、  
すべて関係性のなかで存在し  
ていて、単独で成り立ってい  
るものなど何一つない、とい  
うのがその意味です。

先ず、命をいただいている  
自分という存在は、当然、親、  
もつといえご先祖様との関  
係性の上に成り立っているわ  
けです。また、自分が生きて  
いるということも、たくさん  
のものが関係しています。

たとえば、生きていくうえ  
で欠かせない食事にも、食材  
との関係性がありますし、も  
つと細かくいえば、一粒のお  
米を考えても、それを口にす  
るまでには、生産者であった

り、農業従事者、それを市場

に運ぶ流通業者、販売する小  
売業者、さらには、ごはんを  
炊いてくれる人……といった  
大勢の人の手がかかっている  
わけです。

禅では、口にする一粒のお  
米にも「一〇〇人のお蔭様」  
が関係している、といういい  
方をしたりしますが、これは  
多くの人々が働いてくれてい  
るお陰で今食べることが出来  
ている、ということをといて  
います。そのお蔭様なくして  
は、一粒のお米さえ口にす  
ることが出来ないのです。

これも真理です。ですから、  
自分一人で生きている、自分  
でなんでもできる、と考える  
のは真理から外れていますし、  
どだい、そんなことなどでき  
るわけがないのです。

## すべては関係性のうえに 成り立っている



いまこそ禅にふれるとき

杵野俊明

「ちらも心地よくなるのではあ  
りませんか。いかがですか。  
関係性のなかでなら、確実に  
心地よくなれるのです。」

「自分がくする」というのは、  
「自我」の発想です。それに  
対して、「みんなでくする」  
というのは「無我」の発想と  
いっていいでしょう。真理に  
沿っているのは、いうまでも



神奈川県 / 建功寺

『普照庭』神奈川県 / 蓮勝寺



例えば、心地よくなるとい  
うことを考えてみましょう。

自分が心地よくなるうとした  
として、さて、うまくいくで  
しょうか。たった一人で行く  
ら力んでみても、心地よさに  
包まれることはありません。  
「自分が」は無力なのです。

一方、関係性のなかに心地  
よさを求めたらどうでしょう。  
例えば、誰かに笑顔に向けて、  
明るく挨拶をする。笑顔で挨  
拶をされて気分を害する人は  
いませんね。相手は心地よさ  
を感じます。もちろん、その  
心地よさいっぱい笑顔で、  
こちらに挨拶を返してくれる  
でしょう。その「返礼」でこ



『聴閑庭』神奈川県 / 個人邸

なく、後者です。

仕事も「自分だけが成功す  
る」というのでは、うまくい  
きません。「みんなで成功す  
る」という「無我」の発想で  
のぞむから、いい結果が生ま  
れるのです。このようにみん  
なが幸せになり、ものごとを  
成すのは、すべて「無我」の  
発想です。



ますの・しゅんみょう

1953年、神奈川県生まれ。建功寺（横浜市鶴見区）住職。多摩美術大学環境デザイン学科教授。住職でありながら庭園デザイナーとしても高い評価を得ている。祇園寺紫雲台庭園『龍門庭』など国内外多数の庭園作品を手がける。『心に美しい庭をつくりなさい。』など著作多数。

ルポライター

# 高橋繁行氏 インタビュー

取材 柳澤円

## 消えゆく 「土葬」に考える、 命のつながりと 見送りの形



コロナ禍に入ってはや2年がたとうとしています。この間、私たちは様々な価値観を変えざるを得ない日々を過ごしています。死生観を揺り動かされ、いつかは訪れる自らの最期をどのように迎えたいか、と自問した方もいるかもしれません。

地域によってはほんの二十数年前まで当たり前だった土葬の葬儀は、近年急速に消滅し、現在では火葬が99.9%と圧倒的に主流になりました。“土葬文化の消滅前夜、”とも言えるいま、約30年間にわたる調査を記録したのが、書籍『土葬の村』（講談社現代新書）です。発売8ヶ月間で7刷されるほど反響があった本書を書かれたのは、葬送に関する風土や人々を研究してきたルポライターの高橋繁行さん。2021年10月、下北沢の永正寺にて高橋さんと哲学者・内山節<sup>たかし</sup>さんの講演会が開催されました。本誌では主に高橋さんの講演内容を抜粋してご紹介します。

たかはし・しげゆき

ルポライターとして葬式、笑い、科学、人物を主要テーマに取材・執筆。高橋葬祭研究所を主宰し、死と笑い関連の著書多数。数多くの切り絵作品も手掛けている。近刊は『土葬の村』（講談社現代新書）。



◀野洲（やす・滋賀県）野辺送り（高橋繁行氏作）

本の中では奈良県や京都、それからこの十年ほどは滋賀県でも調査をしてきました。各地に水先案内人となってくださる協力者がいて、土葬や野辺送りを経験した方々に細かく話を聞いてきました。多くの地域に共通していることは、埋葬場所とお参りする場所が違うことです。人が亡くなると慣習に沿った方法で弔いを行い、遺族や村人たちが野辺送りという行列でお棺を移動させます。墓地に着いたら、棺台と呼ばれる台にお棺を置いて引導を渡した後、あらかじめ掘られた場所に埋葬されます。遺族がお墓参りをする時は、先祖代々の石塔墓せきとうぼというお墓で行うんですね。石塔墓はカロートと呼ばれる地中の納骨スペースがなく、ただ地上に墓石が置かれたお参り専用のお墓

### 湯灌ゆかんや野辺送りの時間が 供養くようにつながる

ですが、実際にはかつての弔い方法を知らない人ばかりになってしまったことが大きいと思います。ここでは、本書の中で細かく紹介している各地のお弔いから、特徴的なことを簡単にご紹介します。

です。

また、亡くなった人の体を洗い清める湯灌ゆかんは遺族によって行われていました。作法は地域によって少し違いがありますが、多くが「たらい」を使っていました。琵琶湖の北部ではたらいの上に十文字に縄を掛けて、その上にご遺体を座らせて行なっていたそうです。この村でお話をしてくれた方に、保管されていた古いたらいの実物も見せていただいたのですが、とても小さくてびっくりしました。亡くなった方を座らせて、体をきれいにした後、死装束の袖通しをして着せることはとても大変な作業だったと想像しますが、当時の方は心構えが違っていたのかもかもしれません。

また、多くの土葬の村では「座棺」が一般的でした。故人は男性ならあぐら、女性なら正座の姿勢で収められる、縦型のお棺です。そのため死後硬直が始まる前に故人の膝を曲げておくことが非常に重要で、親族にとっては「最後の親孝行」と言われるほどに大切なことだったそうです。

弔いの慣習は地域ごとに細かい伝承がありました。が、共通する特徴はやはり野

### 想像以上のスピードで 土葬が減少したこの十年

『土葬の村』は、これまでの取材をまとめたものです。火葬が一般的になった現代では、野蛮なことをしていると思う人もいるようですが、土に還るという意味で、私にはとても自然なことのように思えるんですね。実際に土葬で故人を見送ってきた人たちがどんな思いだったのか、各地で取材しました。

私が最初に土葬に興味を持ったのは三十年近く前、ある葬儀サービスの取材をしたことがきっかけです。土葬による葬送がまだ残っている地域を知ったものの、急激に消滅に向かっていることも感じました。ある地区を二〇一三年に訪問した際、誇らしげに「ここでは今も九割以上が土葬」と語ってくれたご住職が、二〇一九年に再訪した時には落胆した表情で「もう土葬は残っていない」と話すほどです。生活様式の変化や人手不足など、継承されない理由は地域によっても様々



辺送りでしょう。野辺送りとは、遺族、親族、僧侶、一般の方々などが墓場までの道を長蛇の列を組み、手作りの道具などを掲げながら歩くものです。滋賀や奈良など各地で取材調査した内容から、行列の内容を簡単に紹介します。

まず先頭は、甲いの象徴の火、松明たいまつを持った人です。その次は遺族が遺影を持ったり、墓標を持ったり、旗のような細長い白い布、これには諸行無常など仏教の言葉が書かれていることが多く、四本あります。続いて、盛り物、燭台しよだい、竹などでできた香炉、「死花」とも

「四花」とも書く紙で作られた花、その後ろはお坊さんたちが続きます。あとには朱傘を持つ人、提灯は二人、その後には白

装束の女性たちが白い布を綱状にして後方の座棺と繋げて持ち、その座棺を持つ人は近親者の男性たち、その後ろがまた提灯、お供え物、さらに旗があつて、そこから後ろは一般の会葬者が野良着のまま続きます。そして一番末尾は村の長老など、お吊いの作法をよく知っている人が白い袴に三角の額紙をしてついでいきます。

### 御遺体と向き合う 機会が大切です

野辺送りや土葬について、二〇〇七年の映画『殯もくろの森』がカンヌ国際映画祭の審査員特別大賞（グランプリ）を受賞した際にも注目されました。

映画のモデルになった奈良市の田原地区は、かなり近年まで土葬が残っていた村であり、日本における最後の土葬の村のひとつです。わたし自身も取材調査中、映画にも出ていた森崎さんと



いう和尚さんにお話を伺った時のことが忘れられません。現代の感覚でいえば土葬のお弔いを理解できない人も多いと思うんですが、和尚さんは「この村にハタチで嫁入りした方が九十歳で亡くなったら、七十年間もここで田畑を耕しながら村の付き合いをしてきたことになる。それを一瞬で見送ってしまう葬儀会館のお葬式にはどうしても私は馴染めない。みんなが無駄をたくさんしながら見送るこ

とが供養になると思う」と話してくれました。

### 見守りの“心”が 孤独死を少なくする

『土葬の村』に良い反響をたくさんいただき、出せてよかったと思っています。コロナ禍もあって、今は本当に最後の看取りがままならないことも多いですね。以前から、特に二〇〇〇年以降は、家族葬などお葬式のコンパクト化もどんどん進みました。コンパクト化すると、それだけ遺体と向き合う機会は激減します。今は死装束や湯灌も全て葬儀屋さんがしてくれるようになりました。もちろんやったことのない家族がするよりもプロにお願いする方が良くらい難しいことでもあるので、葬儀屋さんが遺族に声を掛けて一緒に手伝えるようなのが良いと思います。

土葬の村では日々の付き合いや人間関係など煩わしさもある一方、その風習のおかげで、都市部で近年増加している孤独死などは避けられました。私たちは今、見守りの形を本当に考えなくちゃいけないところにいると思います。

#### 編集後記

講演会では本書の中から特徴的な儀礼を中心にお話しいただきましたが、本書は、日本各地の弔いに関する歴史的な記録がまとめられており、大変貴重な証言と圧倒的な調査力に感銘を受けました。私たちは死後どこへ還り、それまでどんな思いで生きるのが良いのでしょうか。本書を拝読して以降ずっと頭の片隅で考え続けています。



野辺送り切り絵展

いつも楽しく拝読させて頂いております。私も妻も菩提寺が曹洞宗であり、お寺に行った際には貴冊子を持ち帰り、二人で読んでおります。変化の速い世の中だからこそ、禅の教えは、これからもっと大切になると思っています。仕事場の机に(お釈迦さまの最期の教えである『遺教経』の)「八大人覺」の教えを掲げ、心身を引き締める日々です。

青森県 藤川俊彦 様

今回の特集にご登場頂いた高橋繁行氏の著書『土葬の村』(講談社現代新書)を5名の方にプレゼントいたします。仏教企画(下記「お便り募集」送り先)まで、お名前・郵便番号・ご住所・電話番号・プレゼント名を明記のうえハガキでご応募ください。



…… 2022年5月末締切(末日消印有効)

曹洞禅グラフ158号(秋号)プレゼント、  
『洞谷記』は次の方が当選されました。

青森県/藤川俊彦様 山形県/尾形良道様  
神奈川県/西山航様 鳥取県/岡崎すみ子様  
鹿児島県/真子一夫様

身近な人との心温まるふれあいや本誌への感想、仏教についての質問などを600字以内でお寄せください。Eメールでも受け付けております。

送り先……………  
〒252-0116  
神奈川県相模原市緑区城山4-2-5  
仏教企画編集部  
Eメールアドレス……………  
fujiki@water.ocn.ne.jp

# 毎日書道

書家 松山妍流

或値怨賊繞  
各執刀加害  
念彼觀音力  
咸即起慈心

解説  
或いは怨みを持った  
賊に囲まれ  
刀を執り害を加えん  
とするに値つても  
彼の觀音の力を念ずれば  
すぐにみな慈しみの心を  
起こさせられるのである

或値怨賊繞  
各執刀加害  
念彼觀音力  
咸即起慈心

## 作品集

ご家族のみなさまの応募をお待ちしております

お手本を参考にして、作品を半紙(横向、お名前は左側)に書いてご応募ください。(無料)  
ご応募の中から優秀な作品を選び、年に1度誌上で発表し、記念品を贈呈します。  
住所、氏名、電話番号を明記して作品をどしどしお寄せください。  
157号(夏号)~160号(春号)の作品をご応募の方の審査発表は、163号(冬号)にて行います。

送り先 〒252-0116 神奈川県相模原市緑区城山4-2-5  
仏教企画 ☎042-703-8641

締切 2022年5月末

松山妍流先生は、埼玉県所沢市吉祥院住職丸山劫外師のお姉さんで書家(佐藤柯流に師事)です。

# 『曹洞禅グラフ』 募集俳句選

選・尾崎竹詩

## 一列に美しき僧侶や寒の行

三重県 池上悦美

「美しき」は「うつくしき」ではなく「はしき」と読むと五七五の定型に納まった格調高い句です。松尾芭蕉の目指した俳句の境地、「侘び・寂び」の美意識に通じる作品です。無駄や華美を省いた中にある美を追求しています。俳句では直接心情を述べるのはよくないとされていますが敢えて「美しき」と表現されています。その挑戦が成功を収めています。

## 花の雲弘前城の天守閣

岩手県 田中圭子

俳句は作者が説明する文学ではなく、読者が想像する文学です。「気持ち」を書くのではなく「もの」で書くことが有効的です。そのため手法に「取り合わせ」と言われる方法があります。掲句、「春の雲」と「弘前城の天守閣」を配置させただけです。あとは読者が勝手に想像するのです。心情は読者が補ってくれるのです。

## 凍みる灯に出るにあらぬ秘湯かな

東京都 岩淵修身

秘湯の露天風呂でしょうか。暖かくあるべきは

## 作品募集

みなさまのご応募をお待ちしております(お一人3作品まで)

### お申し込み方法

作品、住所、氏名、電話番号を明記して下記のいずれかにてお寄せください。

- はがき、封書で投稿  
送り先・〒252-0116  
相模原市緑区城山4-2-5  
仏教企画  
『曹洞禅グラフ』俳句募集係宛
- Eメールで投稿  
fujiki@water.ocn.ne.jp

締切 令和4年5月31日消印有効

- ご応募の中から優秀な作品を選び、誌上にて発表します。
- 更に年に1回冬号(新年号)にて年間優秀作品を選出し、記念品を贈呈します。

おざき たけし ● 1947年 徳島県阿南市生まれ。2016年 現代俳句協会理事。2019年より神奈川県現代俳句協会会長

## 芽柳の揺れて渡しの艚が乾く

岡山県 井上雲外

一読でのどかな風景が広がります。鄙びた渡し場に小さな渡し舟。傍の柳の木の芽が膨らんできて春本番を待っている。感情を交えず淡々と事実のみ叙述している。さざ波で揺れる舟の中で寅さんが居眠りをしているかもしれませぬ。読む人をそういう気持ちにさせる句です。

## 選者詠

## 花嫁に愁いが少し花辛夷

竹詩

今クール①②にて、仏法のとらえる知覚作用の流れを表した「五蘊」のうち、「受」「想」を説いていきました。

おさらしいたしますと

◆「受」とは、自覚のあるなしに関わらず、すべての刺激情報が受容され続けている作用。

◆「想」とは、受容された刺激情報の一部が、各人固有のイメージの元とつながること知覚の源泉となり、再現可能範囲内に表れ出ている作用。

今回は、「想」から連なる作用の進行である「行」を説いていきます。

一般的に「行」というと、行動や行為のことを思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか。しかし「五蘊」における「行」のとらえ方は少々異なります。

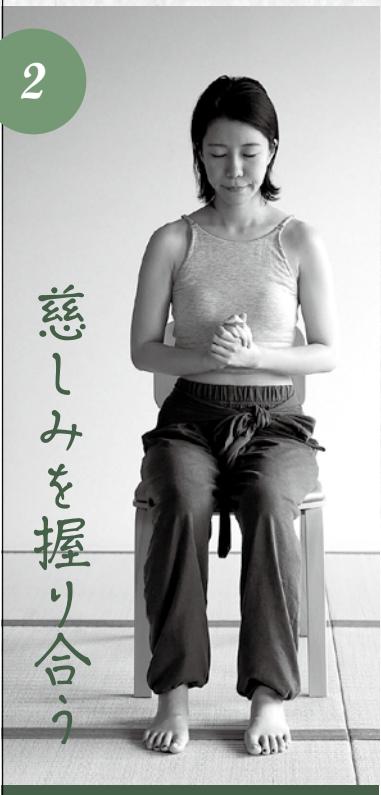
「想」で説いた、各人固有のイメージの元とつながり表れ出ている知覚の源泉とは、例えば「これはこう形作られている」という客観知覚の範囲内にあるものです。この知覚の源泉は、志向や欲求とながることがはじめて客観から主観へと進みます。

志向や欲求とは、次の2種要因



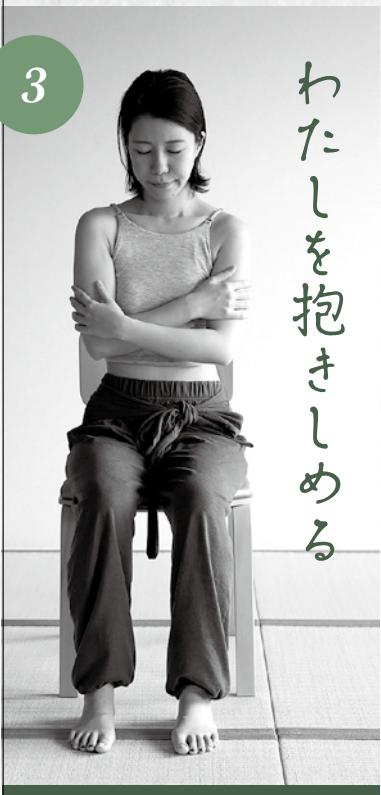
強い想いを握る

1



慈しみを握り合う

2



わたしを抱きしめる

3

## 優しさが培われる「五蘊」の智慧

藤井隆英

ふじい・りゅうえい  
豊橋市一月院副住職。  
横浜市・徳雄山・建功寺  
勤務。北海道大学水産  
学部卒業。同大学院中  
退。整体師。NAC代表。  
身心堂主宰。「ぶつざ  
ふ」「安楽坐禅法」開  
発者。禅をベースにし  
たオリジナルの運動療  
法、動的瞑想法を伝え  
る活動を展開。

### 3 行～何を思うか～

により起こる主観的概念です。

①内側から湧き出るもの…誓い・願ひ・好奇心など。

②外側から動機づけられていくもの…知識・人間関係・環境など。「行」とは、内外からの志向や欲求が、客観知覚の範囲内にて表れ出ている刺激情報と絡み合うことで、主観知覚に変化していく作用です。

私たちは産まれてから死ぬまで、常に主観知覚にて生きております。ですので、どのような志向や欲求を持つかによって生き方が大きく変わっていくのです。

仏法を修めていくということは、良縁と慈悲心に沿って生きていくことです。その実践は、ほとけの心を伴った志向や欲求を自然と生み出します。そして仏法的実践による刺激情報と、ほとけの心として養われた主観的概念が絡み合うことで生まれる、新たな主観知覚が、自らを本質的な安らぎを有した幸せな存在として認知する力を育てていくのです。

今回は、想いを受け止め慈しみの志向が育つ「慈悲の作法」をお伝えします。

**背**筋が伸びながらも上半身にはあまり力が入っていない状態でイスに座ります。両手の平を軽く握り胸の前に置きます。ゆっくり息を吐きながら、息に合わせて自分が今気になっている強い想いを分かち合うよう、互いの手を強く握り合います。息を吐ききったら、しばらく握ったままで想いを深く受け止めます。息が苦しくなる直前に自然に吸い始め、徐々に手の力を抜きます。

**手**の平を軽く握りお腹の前に置きます。肩や腕にはできるだけ力を入れないよう、握ることに集中できる体勢を作ります。ゆっくり息を吐きながら、息に合わせて右手は左手を、左手は右手を慈しむよう互いの手を丁寧に優しく握り合っていきます。吐ききったら、握り合うことにより生まれた想いを深く受け止めます。自然に息を吸い始め、徐々に手の力を抜きます。

**腕**をクロスさせ、互いの手の平を逆側の肩から肘の間に置きます。自分を優しく抱きしめやすい体勢を探るべく手の平を肩肘間にて動かし、決めたらそこで止めます。ゆっくり息を吐きながら、息に合わせて自分で自分を労うよう腕全体の力を使って安らかに抱きしめていきます。吐ききったら、湧き上がる想いを深く受け止めます。自然に息を吸い始め、徐々に腕の力を抜きます。

# まっすぐにすわること

久保田永俊

くぼた・えいしゅん

1975年、東京都生まれ。駒澤大学仏教学部卒業。中瀧寺（千葉県いすみ市）住職。自死遺族に寄り添う活動に取り組んでいる。



挿絵 長谷川葉月

こ

の頃、街中でみかける方がたの椅子のすわりかたが、どうも気になり、つい視界に入ってきてしまいます。家中でも、同様です。長男が、テーブルに対して、斜めにイスを引いて、そのイスが曲がっていることを気にもせず座って字を書いたり、絵を描いたりしていることが増えたため、指摘することが多くなりがちです。ところが年下の長女は、長男とはうってかわって、曲がって座ることが大嫌いな性分らしく、自分のイスを直したら兄のイスまで真っ直ぐに直すことがあります。全ては最初が肝心なのだろうと、改めて感じました。

道元禪師は「正しい坐禅で修行することこそが、仏法の正門である」と説き示されています。身と口（言葉）と意（こころ）の三つが、仏法という真理と合わさることで、正しい人間としてのあり方になるのです。それには坐禅から始まるのです。

大本山永平寺で禪師をつとめられた宮崎突保みやまき といか下は、「一日のうちのわずかな時間でもよい、仏壇に線香をまっすぐに立てて、その前で体をまっすぐに坐ってください。体がまっすぐにになると心がまっすぐになり、心がまっすぐになると、思うことがまっすぐに

なる。思うことがまっすぐになれば、言うことがまっすぐになり、行うことがまっすぐになる」と、かつてこのように仰っております。

また『宝慶記』に、道元禪師の師である如浄じよう禪師のお言葉に「祇管しかんに打坐たざするのみ」と示されています。すなわち坐禅は、坐禅するだけで充分であって、そのとき悟りを求めること自体からも、意識の束縛という煩惱から脱します。脱すること自体からも解放されて自由なあり方しんじんだうく（身心脱落）となるのです。ただ坐禅をする、ただそれだけに打ち込む。この「ただ」というのが、簡単そうにみえますが、非常に難しい一面でもあるのです。まさしく、ただになれない私がいるのです。

虎嘯とらうそふけば蕭蕭しょうしょうとして巖吹がんすい作り、龍吟りゆうぎんずれば冉冉ぜんぜんとして洞雲とううん昏し『従容録』第九一則「南泉牡丹」この意味は、虎が吼えると清らかに巖に風が吹き起り、龍がうめくと、もくもくと洞おり雲が湧き起る。

新年は寅年になります。初心を甦らせつつ、記した語句のように、虎のごとく、龍のごとく、坐禅をともに行ないたいものです。仏心を育てる年にいたしましょう。皆さまの福寿無量を祈念いたします。

**未** 曾有の被害と悲しみをもたらした東日本大震災からもつづく十一年が経ちます。宮城県名取市の閑上<sup>ゆりあげ</sup>に建つ東禅寺も、当時大きな被害を受けました。新たに復興した街の真ん中で、月命日の追悼の鐘を撞き続けている三宅俊乗<sup>ゆりあげ</sup>ご住職にお話を伺いました。

**矢田** 東日本大震災の当時のことをお聞かせいただけますか。

**住職** 実は当日、県外に出かけていまして、私は津波を経験していません。ここに残っていたのは先住夫妻だけでした。直後は非常に混乱したこともあって、戻ってきたのは二日後でした。車では街の二キロ西側までしか入れず、車を降りて瓦礫の上を踏み越えてここまで来ました。

ここに来る前に先住夫妻の安否確認ということで、市内の六く七か所、学校の体育館などが避難所になっていたのですが、全部回りました。みんなに聞いて回ったのですが、全然いなかったというので、生存はかなり厳しいということに覚悟しました。お堂に入りまして、もしかしているのかなと思って探したのですが、それでもいかなかったですね。瓦礫に混ざっているからわからないですよ。

ただ、自衛隊の方が遺体の収容に当たった記録を見ますと、父も母もこのお寺の中で見つかったということでした。ですから、私が来た十三日にはどこかにいたのですね。十六日になって父（先代ご住職、俊昭さん）が見つかって、十八日に母が見つかりました。

後になっていろいろな話を聞くとね、皆さんすごい危機感があったかというところ、そうではなかったようなのです。「本当に十メートルくらいの津波が来るのか」と。ここ閑上は今まで幸いにして、三陸と違って大きな津波は全く来ていなかったのです。ラジオの情報とかカーナビについているテレビの情報などはあったようなのですが、多くの人が信じられなかったようなのです。

ただ一番の不幸は名取市の防災無線が鳴らなかったということですよ。地震でねじが外れて、不具合が生じて。職員が防災無線でアナウンスしているのだけど、実際にこっちは聞こえなかった。それが一番の不幸なのでしょうね。

**矢田** 震災で先住がなくなられて、ご住職になられました。非常に難しい立場から始まったと思うのですが。

**住職** 檀家さんが大勢いらっしゃるので、そのために何とか復興しなくちゃ、という思いでし

宮城県名取市閑上東禅寺  
三宅俊乗さん

東日本大震災から十一年

津波に流され還ってきた  
梵鐘に鎮魂の想いをこめて

取材：矢田海里





「過去には戻れないわけですから、  
未来に向けて気持ちを変えて進んでいきましょう」  
ということはお伝えしてきましたね。

でもどうしてもそこから抜け出せないという方はいます。  
そのときはその方のお話を黙って聞いてきました。

再興なった東禅寺本堂

た。四百五十年近い歴史がありますから、東禅寺を絶えさせることはできないなど。市役所に私の携帯番号を大きく書いて貼っておいたんですよ。それをお檀家さんが見つけて、みんなで連絡取り合ったのでしょね。やっぱりお葬儀をしたいという方が大半でした。ある程度火葬が終わったのは五月の初旬頃でした。

それからお弔い、葬儀に丸一年でしょうか。檀家さんが二百三十五人亡くなっていきますから。それに近い回数のお葬儀をしました。檀家さんの三分の一くらいの方は、家のどなたかがなくなっていますからね。考えられないような状況ですね。

檀家さんには、「過去には戻れないわけですから、未来に向けて気持ちを変えて進んでいき



被災した東禅寺

ましよう」ということはお伝えしてきましたね。でもどうしてもそこから抜け出せないという方はいます。そのときはその方のお話を黙って聞いてきました。下手な助言はしないで、相槌を打って。そういう方もやっぱり時間とともに気持ちもだんだんと落ち着いてきますから。悲しみの極みに落ち込んでいた人も、少しずつ明るくなってきていますからね。

**矢田** 数年前から街に戻ってくる人も多くなりましたね。街の方々はいま、どのような思いで暮らしているのでしょうか？

**住職** 「ご先祖様が眠る場所だから、そう簡単には他の場所へ移ることはできない」あるいは

「多くの人が犠牲になった場所でも、戻れるなら戻りたい。」そういった思いはあると思います。

ただ、戻っていない方もいます。実際は震災前の三分の一くらいに世帯数しかありません。三分の二の方はよそに移っているのです。閑上のあひに行きたくないという方もいます。津波が頭に焼き付いていて、その光景が繰り返されるように足を運べないと。でも不思議と皆さん移転してもこの近辺に住まわれています。気持ちには閑上にあるということでしょう。

我々はお寺ですから、閑上の街全部が慰霊の場と考えています。多くの方が命を失った場所だからこそ、ここでお寺をもう一度再建しようということですね。

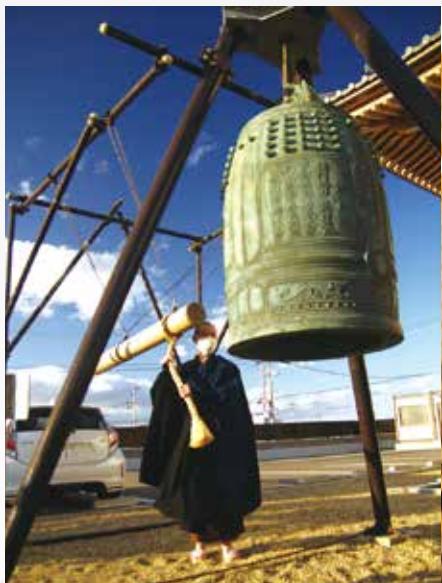
**矢田** 津波で流された鐘が戻ってきたと聞きました。

**住職** 震災直後に、永平寺での修行時代の仲間が何度も来てくれましたね。お墓の中で埋

声じょうといまして、仏様の声なのでね。撞き方によって音色も変わるのです。その人の心が落ち着いているのか、穏やかなのか、少し荒れているのか。皆同じではないのです。その人の心を映す音ですよ。私どもが毎回撞く音でも、一声一声違いますから。ぜひ撞いてみてください。

**矢田** 震災十年の展望などありますでしょうか。これから十年でさらに発展していく姿を見届けられるかどうか。

最近はお参りされる方もちょっと少なくなってきたなと思います。やむを得ないですけども、残念でもあります。月命日だけはもう一度震災の時を思い出して、追悼、慰霊の日として亡くなった人にお参りにきて語り掛けてほしいですね。亡くなった方も、まさかこのようにして亡くなるとは思っていませんでした。無念だと思います。子孫のことを心配なさっている方も多いでしょうから。近況報告をかねて、墓前で亡くなった方に手を合わせてお話しして



鐘楼と副住職



三宅俊乗住職

もれていた鐘を見つけて、埼玉県の飯能市の法光寺で保存してくれました。飯能でも被災したお寺の鐘を皆さんにも撞いてくださいということ。最近になってようやくこちらにも整いましたので、平成三十年の六月にこちらに還ってきたのです。

多少傷はありますが、音に関しては前と変わりません。不思議なものです。青銅製で柔らかい材質だから、もっと傷ついて割れてもおかしくないのですが、いい音色です。

ある意味では震災を乗り越えた鐘なんです。

実際に鐘に命があれば、どのように流されていたのかという、津波の様子を見ているわけです。震災前からこの地であって、震災に遭ったけれども何とか残った。そこに意味があると思うのです。希望の鐘という言葉もありますけど、私はこの鐘は震災で亡くなった方を追悼する鐘だと思っています。

そもそもお寺の鐘の音というのは、仏音ぶつおんあげてほしいなど。だから結構長い方もいますよ。これは何か語り掛けているなど。

**矢田** 来られない方は、ご自宅のお仏壇とかでもいいのですよね。

**住職** そうです、そうです。閑上の方を向いても構わないですよ。そういう気持ちをせめて十一日には持ち続けてもらいたいと思いますね。どこかに出かけて離れていても、思うことはできるわけですから。

**矢田** 街で約千人の方が亡くなったのだからと言って、仮設住宅で千日間毎朝、般若心経を唱えていた方もおられました。

**住職** そうした尊い行いというのは、あとで巡り巡って良い縁として戻ってくるのですね。その方は立派なご自宅を建てて、再建も果たされました。「回向」といって、自分のためにしてなくても、良い行いによって自分に良い縁が巡ってくるのですね。尊い教えの一つでもあります。

いまこそ「禅」にふれるとき	榎野俊明	2
特集 消えゆく「土葬」に考える、命のつながりと見送りの形 ルポライター 高橋繁行氏インタビュー		4
毎日書道	松山妍流	12
俳句募集	尾崎竹詩	13
優しさが培われる「五蘊」の智慧③	藤井隆英	14
生活の中の仏教—まっすぐにすわること—久保田永俊		16
津波に流され還ってきた梵鐘に鎮魂の想いをこめて 三宅俊乗		18

表紙画／平川恒太

# 『ほとけ論』

## 仏の変容から読み解く仏教



正木晃 著  
春秋社刊

定価：[本体3,500円+税]

最寄りの書店にて直接おもとめください